

要 旨

『源氏物語』「やはらかにおびれたる」の肉体的イメージ

矢野 千晶

本論では藤壺の死後、源氏が紫の上に語った藤壺回想の中での言葉「やはらかにおびれたる」が、源氏と藤壺の情交を暗に示しているという仮説について検討した。まず「おびる」は、『源氏物語』初出の語であり、わずかに二例しか見られない特殊な語である。また用例の少なさ故か、起源や意味の定義は、辞典や注釈書によって解釈が分かれている。その解釈を分類した結果、「おびる」は先に存在していた「寝おびる」を下敷きにしており、起きている状態であっても寝ぼけている姿を髣髴とさせる。すなわち共寝の後の無防備な姿を表す、非常に限定的な語であることを明らかにした。また、複数の辞典や古注釈で同一視されている「おほどか」と比較検討した。その結果「おほどか」はおおらかでのんびりと構えているのに対し、「おびる」は内向的で抵抗できない気弱な性格であると区別できた。そして「やはらか」は当時における女性性の象徴であり、主に女性のしぐさや性格を形容する際に用いられる。元々その性質を持っていない女性であっても、男性が「やはらか」だと思い込むことで、理想の女性像を作り上げることができると解した。

藤壺は本来「やはらか」と「おびる」のどちらの性質も持ってない女性である。しかし源氏は、藤壺の公的イメージとはかけ離れた、自分に柔順で弱々しい一面を、藤壺は見せてくれたのだと錯覚している。源氏が藤壺に「やはらかにおびれたる」と感じたのは、藤壺が周囲の目に晒されることなく独占できる場面、すなわち密通である。以上から「やはらかにおびれたる」とは、源氏が藤壺との情事の際にのみ感じ得る、極めて特殊な表現であると考えられる。そしてこの源氏が抱く私的イメージから、生前隠し通してきた親密性を浮き彫りにされたと思った藤壺が、源氏の夢枕に立ち、恨み言を告げるに至ったのである。

また朝顔巻の場面設定に関しては、「やはらかにおびれたる」が藤壺とただならぬ仲であることを示す決定的証拠となりながらも、他のつながりのある女性たちに話題

を次々と転換させることによって、紫の上に悟られないようにするカモフラージュの役割を果たしていると結論づけた。